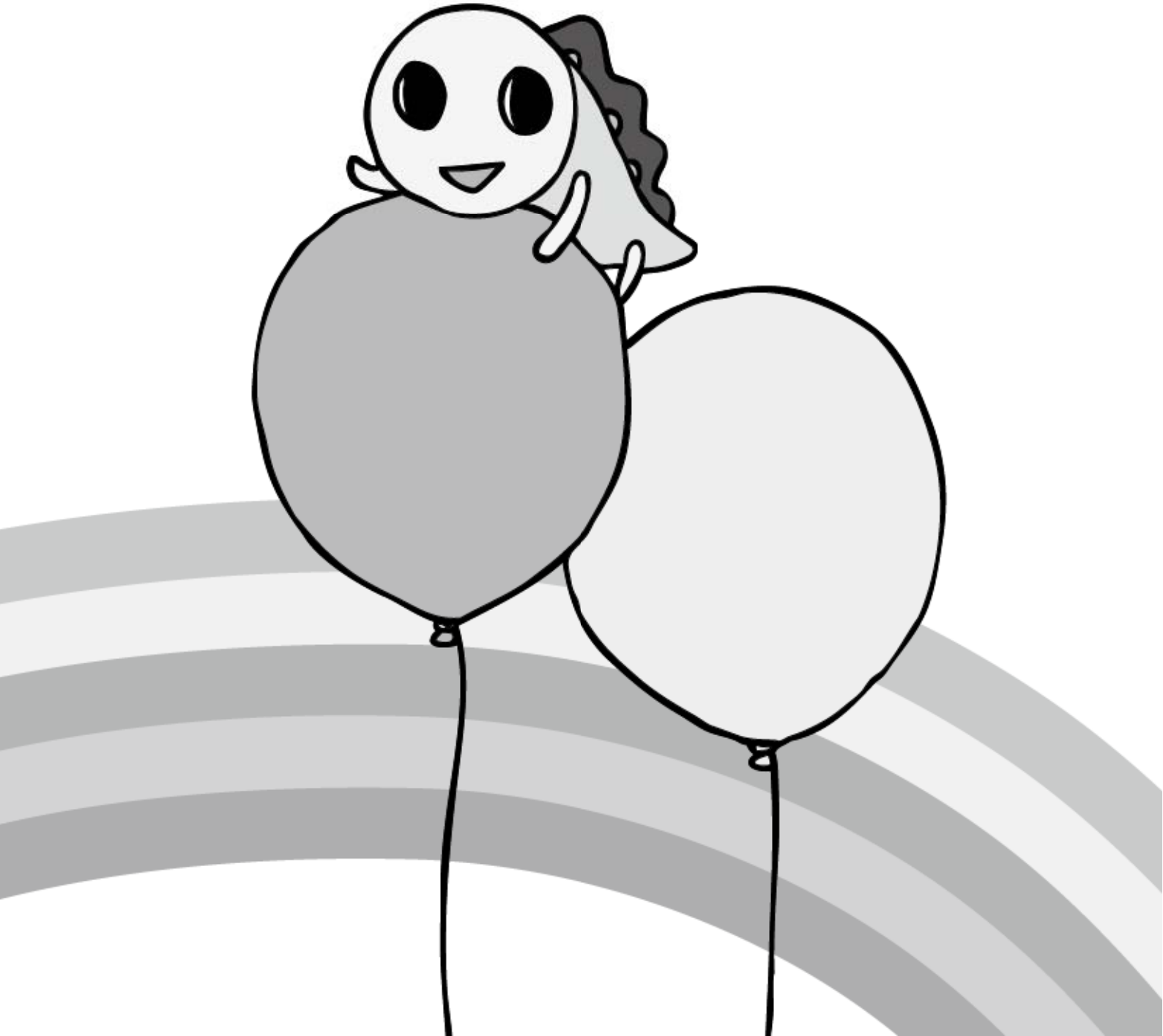
10年後の杉並、私の夢

～ 中学生の部 ～



区長賞

未来の杉並

井荻中学校　一年　中　詩織

十年後……遠いようで意外と近い未来。私は十年後、二十三歳。もう成人して大人になっている。その時私が住むまちは、どんなまちであってほしいか考えてみた。

一、自然や緑を大切にするまち

今、私の家の近くには、樹齢何十年にもなるような木が何本も立っている場所がある。夏の暑い日、そのそばを通るととても涼しく、風で葉っぱがゆれる音も心地良い。でもたまに、もしかしたらこの木がいつか切られて無くなってしまうのではないかと心配になる。実際、私の家の前はついこの間まで生産緑地で、畑の作物や樹木が植えられていたが、ある時あっという間に緑が切り倒され、やがて道路と宅地になってしまった。私は家の前の緑の風景が好きだったため、とても悲しかった。以前、杉並区は二十三区の中で一番緑が多い区だと聞いたことがある。それはとても誇れることだと思う。そんな杉並の良いところを十年後もなくさないでほしい。

二、商店街での買い物を楽しめるまち

私の家の最寄駅には商店街があり、そこには個人の商店がいくつかある。私が好きな店は、たまに買い物をする文房具屋だ。そこには、専門店らしくいろいろな種類の文房具が売られている。前に、ほしい文房具について聞いたところ、メーカーに問い合わせて取り寄せてくれた。友達にプレゼントする物にはかわいくラッピングをしてくれる。電車に乗っていけば、デパートや大型スーパーで少し安い値段で買い物をすることもできるが、わざわざ遠くに出かけなくても身近なまちの中に気軽に買い物できるお店があるのは便利だ。パン屋や八百屋など、生活に必要な店の方々が十年後も笑顔で「いらっしゃい。」と言ってくれたら嬉しいと思う。

三、人と人とのつながりが感じられるまち

私は通学の途中などいつも通る道で、たまに近所の方に話しかけられることがある。先日も、「夏休みは何日までなの？」と聞かれたり、部活に行く途中には、「行ってらっしゃい。」と言われたりした。そんな時私は、地域の方に

見守られていると感じる。都会では、隣にどんな人が住んでいるか分からないこともあるというが、そんな状態では、災害など何か起こった時に助け合うことができないだろう。これから高齢化社会が進み、一人暮らしのお年寄りも増えると、いっそう近所の人が気にしてあげる必要があるのではないだろうか。私は、十年後のまちも、近所の人たちとあいさつを交わすことができる温かい雰囲気のまちであってほしいと思う。

いろいろな人が、それぞれに住みたいまちのイメージをもっているだろう。十年後の杉並は、そんなイメージがたくさんつまったまちであったら素敵だと私は思う。

優秀賞

私の夢と私の望む杉並

東田中学校　三年　野中　成美

「十年後の自分はどうしているだろう。」と考えても、今の私にはわかりません。けれど私には夢があります。十年後にかなえたい夢。それは、介護の仕事をすることです。私がそう思ったのは、あることがきっかけでした。

私は中学一年生の時に職場体験で病院に行かせていただきました。そこで、あるご老人の方のリハビリを見せてもらうことになりました。私はとても緊張して、何か話そうと思っても自分から話すことができませんでした。そんな時、ご老人の方がごみを捨てるのに困っていました。私はご老人の方の前に手を出して、「私にください。」と丁寧にゆっくりと言いました。手にごみを置いてくれた後にご老人の方の目を見ると、笑顔でした。言葉をうまく言えない方でしたが、その笑顔から「ありがとう。」という気持ちが伝わってきたように思いました。私も自然に笑顔になり、こんな風に人を笑顔にできることはこんなにも嬉しいことだったんだと思いました。

今、ご老人の方の孤独死というものが多いです。私は人がみんな優しい杉並が大好きですが、その杉並にも孤独死があるのは事実です。ニュースを見るたびに悲しくなります。一人で死をむかえなければいけない理由は何でしょうか。誰でも死を目の前にするのは怖いです。だから、私はそばで支えたいのです。この杉並に孤独死はなくなってほ

しいです。

私は今までたくさんの方に笑顔にしていただきました。街で泣いていると、家から出てきてくださってあめをくれてなぐさめてくれたことを覚えています。まるで、それが当たり前のようでした。そんなあたたかい街の杉並で、私は人を笑顔にしたいです。楽しい生活を送ってほしいです。その笑顔と生活の支えになることができれば、私は嬉しいです。私が笑顔になった数以上の笑顔を見てみたいし、つくっていきたいと思っています。

私の祖母は足が悪く、障害者手帳を持っています。普段はつえをついていたりするのですが、ちゃんと整備されていない道を歩いたりすると転ぶ可能性があります。私も不安ですし、祖母はもっと不安だと思います。ご老人の方が安心して歩けるようにしてほしいと思います。ただ、母もスロープがついていたりするととても助かると言っていました。そのようなご老人の方が安心して生活できる街にしてほしいと思いました。誰もが笑顔の明るい街にしてほしいです。そして、私はそんな未来の杉並で介護の仕事をずっとやっていきたいです。

優秀賞

十年後の私と杉並～故郷（ふるさと）～

井荻中学校　一年　末松　愛菜

「歩いて汗をかいた後の冷たい牛乳、あ～おいしかった！」小学校四年の時に杉並区へ引っ越してきてから、毎年の夏休みの恒例となった母と参加する万歩会での会話です。万歩会は、荻窪神社を朝六時に出発し、善福寺公園を通って、約一時間三十分ほどの距離を地元の人たちと一緒にゆっくり杉並の町をながめながら歩く会です。中学生はあまり参加していませんが、朝早く起きて見る杉並の町は、普段とは違い、少し静かで、空気が違うように感じ、本当にすがすがしい朝を感じることができ、私は大好きです。私は、生まれてから幼稚園まで兵庫県の宝塚で育ち、杉並に来る前までは、新宿区に住んでいました。それぞれの町に、それぞれの良さがあり、私は、どの町もお気に入りですが、いつの間にか杉並は、今まで住んだ中で一番大好きな町に

なっていました。ゆっくり歩くとこの町の良さが見えてきます。かわいいカモたちが善福寺川を泳ぐ姿、静かで重々しい荻窪神社、緑がまぶしく自然豊かな善福寺公園、高いビルが少なく広く感じる青い空、どれもみんな車で通り過ぎるだけでは感じることのできない、心を豊かにしてくれる何かを感じることができます。それだけでなく、万歩会や祭りなど参加したイベントで家族の楽しい思い出がたくさんできたこと、そして何より、年齢は違うけれど万歩会で一緒に歩くみなさんから伝わるあたたかさや、この杉並で多くのかけがえのない友達と出会えたことなど、人から伝わる触れ合いのぬくもりが、私の心の中でこの杉並を大好きな町へと成長させてくれているように感じます。十年後の私は、二十三歳となっています。その頃どこで何をしているかと考えると、とてもわくわくします。どこか別の場所で働いているかもしれません。そんな十年後を思い浮かべた時「故郷」の歌詞をふと思い出しました。その中にある「うさぎ追いしかの山」は、昔からの大きな自然が大切に残る町、「つつがなしや友がき」は、幾つになっても友達が多く集える町、「いかにいます父母」は、家族の絆を育てる町、そんな町杉並であってほしいと思います。

十年後の杉並区のそんな未来を思いながら、今回はじめて杉並区のホームページから基本構想10年ビジョンを読んでみました。わからないこともあったけれど、その中に書かれていた「みどり豊かな環境にやさしいまち」、「人を育みともにつながる心豊かなまち」を目指すことが書かれていました。私の思う杉並の近未来と重なり何だかとてもうれしくなりました。また、これらの基本構想を実現するために、区民参加による地域社会作りの推進があげられており、とても大切な事だと感じました。私も十年後の杉並のために、ぜひ一緒に取り組んでいきたいと思いました。十年後「忘れがたき故郷」として杉並区が私の心に残り、そして、そのバトンが受け継がれていく「故郷の杉並」になってほしいと心から強く願っています。

優秀賞

さらに魅力のある街へ

井荻中学校　二年　野口　大智

十年後、僕は二十三歳になっています。

二十三歳の僕は、例えばよその街で暮らしていて、この杉並に帰ってきた時、「あぁ、杉並はやっぱりいいなぁ。」と思える街であってほしいと思います。

やっぱりいいなぁと思えること、つまり、今の杉並で僕が好きなところは、緑がとても多いところです。僕の家の近くには、夏に涼しい木陰をつくる大きな木があるし、家々にはよく手入れされた草花がいつも咲いています。一年中、何かしらの野菜が育てられている畑もあります。大きな幹線道路がありながら、公園がたくさんあり、川が流れ、そういう景色は、ほっとします。これらの自然環境が十年後も残っていてほしいなぁと思います。

次に、これからの街を考えるにあたっては、やはり、去年の春に起きた、東日本大震災のことを考えないわけにはいきません。なぜなら、あの震災以降、僕たちは、電気の使い方をはじめ、生活の仕方を根本的に考えなおさなければならなくなったからです。従って、十年後には今よりもエネルギーを消費しないで生活をすること、かつ、僕が残してほしい自然環境を守れる形でエネルギーを作り出すこと、の両方を実現しなくてはなりません。

僕は、中央線の南北に広がる住宅街を見た時に、この日当たりの良い土地から太陽エネルギーを量産できないものか、と考えたことがあります。他にも、駅の改札口の人の往来（足踏み）から発電するしくみについてもテレビで見たことがあります。そういった再生可能エネルギーを結集して、杉並の自然にも優しい生活を続けていけたら良いと思います。

最後に、東日本大震災の時に、被災地の南相馬市と姉妹都市であったことから、様々な支援ができたことについて、やはり、日頃から、少しでも多くの人と交流することが大切であると思いました。それは、離れていても、近くにおいても同じで、日頃から良い交流をしていることで困った時にも助け合えるのだと思います。

以上、新しい再生可能なエネルギーを利用して、今の豊

かな自然を守り、周りの人たちと交流を重ねて暮らせる街であること――これが、今の僕が考える十年後のこうあってほしい杉並の街です。どれも、今日明日に実現するものではないし、また、ある日突然にかなうものでもありません。僕も、落ちているゴミを拾うとか、節電に努めるとか、友達と仲良くするなど、日々自分にできる小さなことを続けながら、十年後を迎えたいと思います。

優秀賞

近未来の杉並がこんなまちであってほしい

神明中学校　二年　岸本　ゆい

私の思う、杉並区のすばらしい所は二つあります。一番目は、都会に近いけれど自然が豊かという所です。私の家の前には川が流れていて、いつも鴨などの生き物がいます。また、街路樹や公園が多くある所も良いと思います。二番目は、子育てを支援する充実した制度がある所です。例を挙げると、中学三年生まで医療費が無償などです。私は、よくかぜをひいていたのでこの制度にはすごく感謝しています。また、近未来の杉並でもずっと続いてほしいと思います。

しかし、このような制度は全て杉並区民や杉並区にある企業が払う税金によって賄われています。そこで私は、「どうしたら税金が集まるのか？」と考えてみました。まず一番目は、「杉並区に住んでみたい」と思わせる努力が必要だと思います。例を挙げると、制度の充実さや、自然豊かな街づくり、活気にあふれた商店街づくりなどです。二番目は、「企業を発展させる、杉並区に企業を呼ぶ努力」が必要だと思います。また、私の家の近くには商店街があります。その商店街は、いつも活気があり、お店の人も親切で、地域と密着しています。商店街が潤えば、税収が増え、お金が入り、商店街に活気があふれます。商店街に活気があふれれば、住んでみたいと思う人が増えます。住む人が増えれば税収も増え、良いサービスや制度、環境づくりができるようになります。私は、この循環が大切だと思います。

次に私には「近未来の杉並がこんなまちであってほしい」と思うことが二つあります。一番目は、子どもの教育施設を学校の隣につくってほしいということです。私の妹は昨

年まで、学童クラブに通っていました。学校から児童館まで十分かかります。人通りも多くないので、これでは安全とはいえないと思います。ですから、近未来の杉並では今以上に「安全・安心できるまち」であってほしいです。二番目は、公立の小・中学校を拠点にした子育て・老人施設の統合をしてほしいということです。これからますます少子化と高齢化が進むと聞きました。保育園・幼稚園・児童館などの教育施設と老人施設を統合し、例えば子ども好きのお年寄りが子どもたちの面倒を見てくれると、労働者の負担が軽減され、お年寄りのやり甲斐も生まれます。子どもたちが小さい時からお年寄りとの交流をすることで、子どもたちが大人になった時に、お年寄りを大切にしてくれるのではないかと思います。また、今増えている悲しい孤独死も防ぐことができるのではないかと思います。

私は杉並の良い所やすばらしい所を近未来やその先の未来に残していってほしいと思います。今回改めて杉並を誇りに思いました。

優秀賞

近未来・十年後の杉並

神明中学校　二年　吉本　晶

十年後僕は二十四歳だ。僕にとって十年後は未来というよりは現実の延長のように思える。これからの十年間の頑張りによって人生が良くも悪くもなるからだ。「十年後の杉並区」も同じだと思う。十年後皆が住みたいステキな街になっているかは、僕たち区民一人一人がどのような努力を一年一年積み重ねていくかによると思う。僕らは何を目指せばよいのであろう。それは人によってまったく違うが、僕はこの街で皆が楽しく仲良く幸せを感じながら毎日を笑って暮らせることを目指していきたい。そのためにはどうしたら良いのだろうか。

僕は米国で生まれ、幼い頃は両親といろいろな国で暮らしてきた。一番便利で綺麗な街は日本だと思う。しかし、皆の心が温かく豊かだったのはパラグアイの日系社会だっ

た。

パラグアイの日系人は若者から大人まで一年で一番大切な日は「敬老の日」だといい、敬老の日の出し物を必死に練習していた。日頃からお年寄りを大切にし、自分たちが今あるのは先輩方のお陰なのだと感謝していた。村をあげての運動会は大人から子どもまでの全員参加で、競技の後は青年団がバーベキューをしてくれた。一年を通じて異世代間の交流がとても盛んで常に声をかけ合っていたように思う。もちろん街の規模や都会と農村という違いはあるし、皆が顔みしりである息苦しさもあるだろう。良い所ばかりではないが社会全体が温かく皆の顔がエネルギーに満ちていた。

僕たちの街の人たちの顔はどうだろう。僕を含めて自分と関係の無い人への関心は薄く、個人が好きなように暮らしているイメージが強い。二年前、パラグアイの知り合いが遊びに来た時「どうして日本の人は疲れているの。」と言われたことが妙に気にかかる。

杉並区と言えば昔から緑あふれる閑静な住宅街と言われているが、近年僕の家の周りには中層のマンションが増え至る所にコンビニがある。住むにはとても便利だが知らない人が増え、人の家の前に平気でゴミを捨てていく人もいる。僕たちは周りを見ず携帯を見ながら歩いている。子どもの数よりお年寄りの数の方が増えてきている。このままだと十年後は個人の生活はより便利になっていくが、人と人との心の距離はどんどん離れていってしまいそうな気がするのは僕だけだろうか。

僕はパラグアイのようにいろいろな世代や立場の人たちが交流する場がもっともっとあった方が良いと思う。お祭りや町おこしのイベント、ボランティア活動や避難訓練、卓球やゲートボールなどの幅広い世代が楽しめるスポーツなどを通して、日頃から一緒に活動する場を増やすことが、顔見知りになれ、いざという時に協力し合えるのではと思うからだ。

毎日出会う人たちに笑顔で挨拶ができ、相手のことを思いやれる関係を作ることが十年後の杉並区、僕らの街を住んでみたい、行ってみたいすてきな街にするのではと思う。

佳作

引き継がれる人の輪

天沼中学校　二年　島田　清香

私は、十年後の杉並区について考えていた時に、これまで二年ごとに引っ越して生活してきた所の良かったことを思い出してみました。それぞれ長所短所はあったけれど、今一番杉並区に必要だと思うものは、地域のつながりであり、人と人とのつながりだと思います。

三年前に静岡からこちらへ引っ越してきた時に、子どもの遊ぶ声が聞こえないことや、町内会や子ども会の活動がほとんど無いことに驚きました。

例えば静岡では、小学校の入学式や卒業式に学区内の町内会長さんが全員出席してくださって、おじいちゃんがずらっと並んでいました。初めは驚いたけれど、生活しているうちにその理由が分かってきました。

なぜかというと、静岡は東海地震に備えて町会ごとに世帯数や家族構成を確認し、必要な物を倉庫に蓄えていました。

お互いの顔が分かるようにいろいろなイベントがあって、町会ごとに花見や夏祭り、子ども会の遠足があって、秋には小学校の校庭で町会対抗の運動会もありました。

お互いをなんとなく知っているので、公園でかなり激しい遊びをしていても、よほどでなければ怒られなかったし、直接叱ってもくれました。

しかし、こちらでは公園で水鉄砲を使い遊んでいた小学生がいた時に、教育委員会から学校に連絡があったと聞きました。もちろん小学生が悪いのですが、直接叱ったり、子どもも大人の言葉を聞いて反省するようになったらいいと思います。悪さをすると、いつのまにか親の耳に入っているので迂闊なことはできないと思うようになります。こういう意味でも、地域のつながりというのは大切だと思います。

これから十年経ったら、私は二十四歳になります。同級生の中にはお母さん、お父さんになっている人がいるかもしれません。

今、私たちが地域の中でつながれば、十年後、二十年後には赤ちゃんからお年寄りまで安心して暮らすことができ

るような街になっていると思います。
みんなでお互いを思いやり、支え合える杉並区になっていることが私の希望です。

佳作

十年後の杉並

神明中学校　一年　村上　麻帆子

私は十年後の杉並を「誰もが暮らしやすい街」にしたいです。

なぜかというと、今でさえも体が不自由な人は、暮らしづらい環境で生活をしているからです。

私は小学六年生のときに、総合の授業で体の不自由な人にお話をうかがう機会がありました。目の不自由な女性の方、足が不自由で車いすを使っている方にお話をうかがうことができました。最初は何を考えているのか、何をしてあげればいいのか、全く分かりませんでした。けれど、話を聞いていると何をすればいいのか分かりました。すごく単純ですが、「困っていたときに声をかける。」でした。教えてくださった方々は、「信号が青になったら教えてほしい。」や「段差につっかかっていたら押し上げてほしい。」など詳しく教えてくださいました。また、私が特に聞いていて身にしみたことは、「他の人と同じに、平等に接してほしい。」ということでした。確かに、たまに「〜だから」など、あの人は障がいがあるから仕方ない、と言う人もいます。ですが、絶対に間違っています。私たちと同じ人間だからです。

このように、人と人とのつながりがあり、差別がなく、誰もが暮らしやすい街になればいいな、と思いました。また、人と人とのつながりだけでなく、街の使いやすさやデザインにも注目し、歩道と車道の間の段差を少なくし、車いすの人がつっかからない道をつくったりしていきたいです。

ですが、先ほど「歩道と車道の間の段差をなくす。」と書きましたが、段差がないと目の不自由な人は歩道から間違えて車道に行ってしまいとても危険です。「誰もが暮らしやすい街」をつくるのは無理なのでは、そう言う人もいるかもしれません。

けれど、段差を低くすれば、どちらも暮らしやすいはずです。二つの間の意見を採れば、きっと住みよい、心地よい杉並になるはずです。

私の将来の夢はインテリアコーディネーターです。住みよく楽しくなるような、そんな部屋をデザインしたい、そんな思いからでした。ですが、部屋というせまい範囲にとらわれず、街という広い範囲をデザインしたいと思うようにもなりました。私は将来、杉並をデザインして誰もが暮らしやすい街、そう呼ばれたいと思います。

佳作

笑顔がたくさん・みんなに優しい杉並

神明中学校　二年　渡部　菜々子

十年後の杉並は、みんなに優しい町になってほしいです。今の杉並が、みんなに優しくないかと言われたら、それは違うと思います。道路をわたれる横断歩道があり、コンビニなどもたくさんあり、すごく便利です。しかし、考えてみてください。私は、物を見ることができ、音を聞くことができ、体を自由に動かすことができます。しかし、それができない人たちがいることを忘れてはいけないと思います。例えば、駅やデパートにあるエスカレーターはどうでしょう。私たちからすれば、階段を使わなくていいのですから、とても便利です。でも、車いすの人や目の不自由な人にとっては、反対にとても危険な物です。だからといって、無いほうがいいというわけではありません。私たちにとっては便利でも、車いすの人たちにとっては、不便な物もあるということを、知ってもらいたかったのです。公共の物だけではありません。放置自転車も例にあげられます。時には、道の半分を無くしてしまう放置自転車はとても危険です。しかしこれは、私たちが気をつけることによって、無くすことができます。私たちは、いつ体の自由が失われるかなんてわかりません。もしかしたら明日、事故にあってしまうかもしれない。そんな事は誰にもわかりません。もし、自分がそのような立場になった時、放置自転車をどう思うでしょうか。危険だと思いませんか。だから、私たちにも、できることはたくさんあると思います。

以前に、先生がこんなお話をしてくださったことがあり

ます。

「外国では、横断歩道をわたるとき、近くにお年寄りの人や体の不自由な人がいたら、一緒にわたるんだよ。」びっくりしました。杉並、そして日本にはそんな習慣はありません。でもこれから、少しずつでも習慣になっていったらいいなと思いました。

私たちは協力して生きていくことが必要です。つい、自分の都合のいいように行動してしまいがちですが、何かをする前に一瞬でも周りに目を向けるようにしたら、間違った行動はしないと思います。みんなが、この町に来てよかったと思い、この町が大好きですと言えるようになったらいいです。どこよりも笑顔が輝いているような場所に『みんな』でしていきましょう。

佳作

十年後、杉並のまちで私は

神明中学校　三年　佐藤　百合

私には、幼稚園生の時からの夢があります。それは、病院で働くことです。理由は、辛い思いをしている人たちを助けたいから。きっと、医療関係の仕事を目指す人の多くはそう思うだろうし、私も心からそう思います。そして医療従事者となり、私が生まれたこの地で人々の助けになりたいのです。

夢を実現させるため、私は校外学習・職場訪問では荻窪の病院を希望し、実際に医師や看護師として働いている方々にお話をうかがったり、院内の施設を見学させていただきました。新生児を管理する施設があったり、入院する患者さんの部屋もありました。院内で散歩をしているお年寄りもいて、ここを訪れる患者さんを救う医療の仕事へのあこがれは、強いものとなりました。「人の命を救う」と

いうのはとても難しい事だと思うけれど、とにかく素晴らしい事だと思いました。

五日間あった職場体験では、上井草の老人ホームへ行きました。これも私が福祉施設を希望したからです。そして実際に体験がはじまると、予想していた環境とはだいぶ違ったのです。小学生の時、隣接している老人ホームへ見学に行きました。そこはとても明るく、和やかで、正直ヘルパーさんたちの仕事は楽そうに見えてしまいました。しかし、実際はその和やかな雰囲気の裏で、職員の方々は真剣な会議をくり広げていました。楽な仕事なんてない、という事を実感しました。中学生の私でも担当の方が反省点や感想などを真面目に尋ね、緊張がとけませんでした。

……となると、命を救う病院はどんなに厳しい仕事でしょうか。だらしない性格で、ろくに勉強もできない私が、社会に貢献できるでしょうか。このまま何も変わらなかったら、命を助けるなんて到底無理でしょう。

こうして実際の現場に行くことで、私は自分の無力さを身にしみて感じることができました。

私は杉並区で今、かけがえのない時間を過ごしています。小学生のときはとくに、近所の数ある公園で、友達とたくさん遊びました。かけがえのない時間と、大切な友達と出会えたのは杉並区に住んでいたからこそのこと。それと、こうして健康に生活できるのは病院で助けてくれる方々がいたからです。私はここでたくさん支えられたので、今度は私がこれからの杉並を支える一員となるために勉強し、安心に暮らせる、また支えあえるまちを皆で一緒につくっていきたいです。

佳作

私の夢

松ノ木中学校　三年　関根　有紀

私の将来の夢はスポーツ科学者になることです。

私は女子サッカーをやっています。なので、テレビやスタジアムで男子サッカーも女子サッカーもよく観戦します。そんな時に「男子と女子は体格も違うし、戦い方が違うな。どうしてだろう。」と疑問に思うことがあります。また、練習していると「どうやったら速く走れるかな。」

と思うこともあります。こんな小さな疑問は誰にだってあると思います。私はそんな疑問を科学で解明したいです。そして、たくさん研究してスポーツに関する知識をたくさん得たいです。

私にはスポーツ科学者になった後の夢もあります。それは、女子サッカーのさらなる普及や子どもの体力向上などに携わることです。例えば、女子サッカー部の設立の手伝いや子ども向けのスポーツクリニックを開催したいです。

東日本大震災直後にあった女子ワールドカップなでしこの優勝、ロンドンオリンピックで世界中の国の選手が金メダルを獲るために戦っている姿。私はこれらを見て、感動したし自分も頑張ろうと勇気づけられました。こんなふうに思ったのは私だけではないはずです。もし、そうであればスポーツのもつ力はとても素晴らしいものだと思います。

「多くの人にスポーツを身近なものとして親しんでほしい。」そのために、私はまずこの杉並区のスポーツ環境を整えることをしていきたいと考えました。以前、私はテレビでスポーツ先進国・ドイツのスポーツへの取り組みが紹介されている番組を観ました。ドイツでは約五十年前に国民の健康のために、多くのスポーツ施設をつくろうと計画したそうです。まず、国・州・市町村それぞれが資金を出してスポーツ施設の充実を図りました。そして、それぞれの町の人口に合った規模のスポーツ施設をつくりました。それにより、子どもからお年寄りまで家族揃って生涯を通じてスポーツを楽しむことができるようになったそうです。

私はこのドイツのような子どもからお年寄りまで、健康な人も障がいをもつ人も、誰でも分け隔てなく自由にスポーツを楽しめる杉並区をつくりたいです。そして、その取り組みに私も携わりたいと思います。

佳作

笑顔の溢れる街

松ノ木中学校　三年　庭野　雪音

私が夢見る杉並区の未来にはまず、子どもたちの姿が必要不可欠です。それも大勢の、様々な表情をした子どもた

ちでなければなりません。初めは笑顔でなくても良いんです。それぞれの個性を体全体で表した、自由に育った子どもたち。そんな子どもたちが、十年後の私たちのような大人の付き添いのもと、自然いっぱいの杉並区を駆けまわる姿。それだけでも、私にとっては素晴らしい光景のように思えます。それはきっと、私や私の同級生が、なかなかできなかったことだからです。

漫画・パソコン・アニメ・ゲームなどは、私たちの目にはとても魅力的に映りました。薄暗い部屋の中、それらに熱中した人は少なくないはずです。もちろん私も、今でもそんな遊びが大好きです。けれどたまにふと、寂しくなることがありました。そんな時はきまってこんなことを考えています。もし小さい頃から皆と外を走りまわるような子どもだったら、どうなっていたのだろう、と。ゲームや漫画は確かに良いものですが、それに熱中するあまり、自然の中にある楽しみを見逃してしまった子どもたちは、どれくらいいるのでしょうか。

だから私は将来、子どもたちが自然と触れ合う機会を、できるだけたくさん作りたいと思っています。月に一回でも皆で集まり、自然の中で遊び、時に自然について教わる。大人たちも集まって、どうしたら子どもたちが心の底から楽しめるのかを考える。子どものために大人が頭を悩ませ、協力できる。それはとても素敵なことではありませんか。最初は泣いていたり、怒っていたり、退屈そうだった子が笑ってくれたら、それは私たちにとっても大きな喜びです。それが、私の夢見るこの街の姿です。

私は杉並区が好きです。自然は豊かで建物もきれいな、良い環境だと思います。私の通う学校だけなのか、杉並区の学校全てが行っているのかは分かりませんが、毎年生徒を地域ボランティアに参加させているのも良いと思います。だから、もっと良くしていきたいのです。もっとたくさんの人に、杉並区を好きと言ってもらいたいのです。

まずは地域の人にあいさつをするだけでも良いでしょう。そうしたら次は、笑顔で会話できるようになります。そうして親しくなった人たちが集まり、団結して問題を解決していく。そして最後はたくさんの人が笑顔になる、そんな素敵な杉並区を目指したいです。

佳作

十年後の杉並・私の夢

大宮中学校　三年　宮本　匠太朗

今、私たちが住み、暮らしている「杉並」が十年後、どうなっているか分かりません。しかし、この「杉並」がどうなっていてほしい、という思いがあります。

それは、人が過ごしやすく、子どもが笑っていることができるまちになっていてほしいと思います。それは、災害に強いまちでもあり、みどりが豊かなまちでもあり、杉並に住む人々が互いに支えあうまちでもあると思います。

そんな杉並というまちを作り上げるため、私たちがしなければならないことはまず、同じ地域、近所に住まう人々が結びつきを強めることだと思います。人々が結びつき支えあうことで、子どもが育てやすい環境、そして、災害に強く、安心に暮らせるまちになると思います。そんなまちを杉並に住まう人々が作り上げた次は行政の出番です。行政が率先して、みどりや公共施設を作り、杉並で子どもが生まれ育つ環境を作り上げるべきだと思います。杉並では産業だけではなく、環境も共に形成することが大事だと思います。そして、このように成長した杉並は、人を育み共につながる心豊かなまち、になることができると思います。

このように、行政だけでなく、杉並に住む人々が共に協力しあい、共に成長することが大事であると思います。この杉並に住み、杉並をふるさととし、杉並に生まれ育った人々が、この杉並を良くしたい、十年後二十年後、それ以上の未来に自分の子どもが笑って過ごせるまちを作りたいと思い、そんなまちを作り上げる努力をすることが、この杉並がより良いまちになることができる、一番の近道だと思います。

僕は杉並で生まれ、育ってきました。僕はそんなこのまちが好きです。そして、僕のふるさとでもあります。そんなこのまちが今よりももっと、より良く、過ごしやすいまちにしたいです。そのために僕は、このまちと共に成長し、同じように考える人たちと共に十年後の杉並を作り上げていきたいです。

佳作

変わらずに当たり前のことを

西宮中学校　一年　辰己　怜史

杉並区ができて八十年、その間、井の頭線の開通、戦争、僕の通う西宮中の誕生、杉並の街並みはとても変わってきたと思う。杉並だけでなく日本全体が豊かで便利な社会になったという。僕自身は、昔を知らないので今が豊かで便利だとはあまり感じないが、祖父母に昔の話を聞くと、今との違いに驚くことがある。それでも、井の頭線のない久我山や、田んぼや畑ばかりの街並み、コンビニや携帯電話がない世の中は、全く想像がつかない。

では、この八十年の間に、何もかも変わってしまったのだろうか。歴史はその時代を生きた様々な人たちの歴史でもあり、一人一人の人たちの思いの積み重ねだと思う。そう考えると、社会で生活するうえでの大切な部分は変わらなかったからこそ、今があるのではないかと思う。環境は大きく変わったかもしれないが、思いやりや協力、未来を思う気持ちは八十年前も同じだったのではないか。

僕の両親は、この杉並で介護の仕事をしている。僕自身も祖母の介護を経験し、比較的介護を身近に感じながら生活してきた。父は「お年寄りお一人お一人に歴史があり、そこに敬意を払い感謝することが介護の出発点で、お一人お一人が笑顔で生活が続けられるよう、一緒に考えていくのが介護だ。そして、一番大切なのは笑顔で挨拶することだ。」と教えてくれたことがある。

お年寄りはパソコンがない時代でも工夫して今の社会をつくってきた。お年寄りがいたからこそ、今自分は生活できている。僕は杉並に住み始めて十年だけど、これからもっと愛着がわき、杉並に住み続けたいと思うだろう。僕の何倍も杉並で生活しているお年寄りが、自分の街でずっと生活を続けたいと思うのは当たり前だと思う。そして、自分の街に住み続けるには、人の思いやりや協力が欠かせないと思う。年をとると、重い物が持てなくなったり、一人ではできないことが出てくるお年寄りもいる。そういう人たちは、誰かの手助けがあれば生活を続けることができるが、その手助けは別に介護の仕事だけではなく、僕も含め誰でもできることがある。それが、「笑顔で挨拶する。」ことだ。

笑顔で挨拶することで、自分は一人ではないとお互いが思えるし、みんながここで生活を続けたいんだと、言葉でなくても伝え合うことができる。そして、それが地域の絆となり、地域への愛着にもつながるのだと思う。

「笑顔は伝染する。」という言葉を聞いたことがある。笑顔を向けられれば、それだけで自分も笑顔になる。一人の笑顔がどんどん広がって、杉並じゅうが笑顔であふれたら、どんなに素晴らしいことだろう。十年後もみんなが笑顔でいられるよう、笑顔で挨拶という当たり前のことを当たり前にし、感謝と思いやりという変わらないものを変わらず持ち続けていきたい。

佳作

あいさつがあふれる街へ

西宮中学校　二年　石森　志歩

十年後。十年後、今現在十三歳である私は二十三歳です。もう立派な「大人」である私は、十年後もこの杉並という街で生活しているのでしょうか。その時の杉並は、どうなっているのでしょう。私は「あいさつがあふれる街」であってほしいと思います。

私は中学校に入り運動部に所属し、そこで礼儀を教わりました。礼儀といっても難しいものではありません。それは「あいさつ」です。基本的に「学校の先生や、学校にいらした方には必ずあいさつをする。」というようなものですが、私は中学校で二年半ほど過ごし、「あいさつ」を街中で使うと、いいことがあると知りました。

ある週末、部活の練習試合で遠征することになり、バスを利用しました。バスに乗る時、運転手さんに何か言う人はほとんどいません。ただ黙ってお金を払い、座席に向かいます。一見、普通にある光景ですが、私は時々、これを見て寂しいと思っていました。でも、何をどうしたらいいのか分からず、皆と同じように黙って乗り込もうとしました。すると私の前に並んで乗った友達が、ごくあたり前のように運転手さんに向かって、

「よろしくお願いします。」

と言っていたのです。私はおどろくと同時に今までのどうしたらいいのかの謎が解けた気がして、私もあわてて乗り

込みながら、
「お願いします。」
と言ってみました。すると運転手さんは笑顔を見せてくれたのです。私はそれをとても嬉しく思いました。
今のバスの話は一例ですが、それでも、私たちがしようと思えばできる「あいさつ」は私たちの身のまわりに沢山あるのだと私は考えます。それなのに、その「あいさつ」を活かすことができていない人も私を含め多いのではないかと思います。なかなか声が出しづらい人もいるのでしょうが、「今」を生きている私たちが勇気を出して声を出していき、あいさつをしないことではなくあいさつをすることを「普通」にしていくことで、「十年後」の杉並も変わってくるのではないかと私は思います。
「あいさつ」をすれば、笑顔が増え、人とのつながりが増え、時には絆も深まります。そんな素敵な「あいさつ」が十年後、そしてその何十年先までの人と人との間で生まれつづけていれば、それは私の本望です。
十年後。その時この街がどうなるかなんて誰にも分からないけれど、明るい笑顔とあいさつに満ちあふれた街であればいいなと私は思います。そう願うのは何より、私はこの「杉並区」が大好きだからです。

佳作

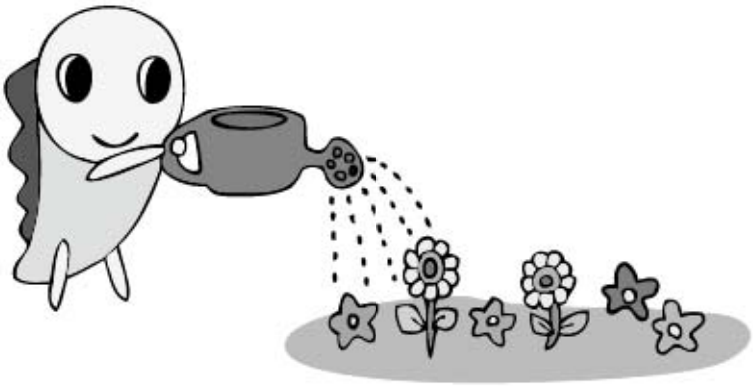
十年後の杉並

西宮中学校　二年　鈴木　光太郎

東日本大震災の後、原子力発電所のかわりとなる再生可能エネルギーがいろいろと注目されています。
特に大きく期待されている大規模太陽光発電所（メガソーラー）は、全国の工業団地や産業団地を活用して、発電パネルをしきつめ、電力を供給していくようです。地方自治体は地域の経済の再生のためにもとりくんでいきたいと、八月二十七日の毎日新聞に書いてありました。再生可能エネルギーは、電力会社に固定価格で買い取ってもらえるので、ソフトバンクやシャープなどの大手企業もたくさん進出しているようです。
杉並区は地方とくらべると広い土地があまりありませんが、学校や図書館などの公共施設の屋上などにソーラーパネルを設置して、太陽光発電を少しでもとり入れることが

できたら、少しは日本全体の電力供給に役立つことができると思います。自分たちが使う電気を自分の住んでいるところでつくることも大事なことだと思います。

十年後の杉並が環境整備の整ったまちになるために、ゴミが放置されることなく、できるだけゴミを出さないように努力することも大切だと思います。ゴミ処理ができていないときは罰金をとることも必要だと思います。もし、ゴミができてもリサイクルできるものは全てリサイクルすればゴミの量はけっこう減ると思います。

環境をよくするために、植物を育てることが可能な場所で植物を育てて、みどりをふやし、みどり豊かな杉並にするといいと思います。また、植物を育てることによって日陰がふえて涼しくなる、涼しくなると夏が快適に過ごしやすくなるし、エアコンを使う量が減る、エアコンを使う量が減ると節電になるというようによくなることがたくさんあります。ですから、植物を育てたほうがいいと思います。

十年後の杉並がみどり豊かで、暮らしやすく快適なまちであるためには、区民一人一人がエネルギーを大切にする、ゴミの量を減らす、リサイクルできるゴミはリサイクルする、植物を育てようとするなどの意識をもつことがなによりも重要だと僕は思います。